

壮烈！赤禪隊長山田鵬輔

会員 西村 洋一

はじめに

慶応二年、山口の鰐石で赤祢武人が晒し首、彼は柱島の医師松崎家の長男、阿月浦家の克己堂門下生で松下村塾に学んだ博識多才な若者だった。

多くの志士が犠牲になった幕末の長州はどんな状況だったのだろう。この年、長州は再び幕府に追い詰められ四境戦争に突入する。この戦で活躍した人物といえ、やはり海軍総督高杉晋作だろうか。

あまり知られていないが、四境戦争小倉口の戦いで壮烈な最期を遂げた志士山田鵬輔は周南市出身の奇兵隊士である。

(一) 慶応二年睦月の動き

・元旦、長府藩主の側近印藤^{いんどうのぶ}聿が龍馬に槍の達人三吉慎蔵を紹介する。

・四日、同盟を前提に薩摩の黒田清隆・桂・品川らが大坂に到着する。

・四日、長州藩直目付の山県半蔵が「長防臣民合議書」を起草する。

・上旬、京へ上る龍馬に晋作が激励の漢詩を記した扇と短銃一丁を贈る。

・十日、三吉が藩命を受け龍馬と上京、十九日伏見の寺田屋に投宿する。

長防二別臣長合議局法創製本
 廿六萬部有奇同腹同心と各
 懐一部以備死生後急意蓋使天下
 万世無決死快戰臣子之分可
 上也

皇元治二年乙丑十一月

長防臣民合議書の冒頭

・廿一日、晋作は萩に帰省、息子梅坊を三日ばかり可愛がって過ごす。

・廿一日、京都薩摩藩邸で桂・小松・西郷の薩長会談が始まる。翌廿二日に、小松帯刀の寓居で薩長同盟が成立する。

・廿三日夜、龍馬は小松帯刀の寓居から三吉の待つ伏見の寺田屋に戻って来た。この頃龍馬は西郷小次郎という偽名を使って用心していたが、深夜の二時頃に六尺棒の音を聞いたお龍が裏の階段から上がって急報を告げた。

「御用心なされ、槍を持った人たちが階段を上つています」

龍馬は獲り方が短銃を払った刀で左右の親指と左手の人差し指を負傷、三吉が龍馬に肩を貸し北へ逃走、壕川の材木屋二階に身を隠す。三吉が薩摩藩邸に駆け込んで救援を要請、龍馬は川舟で運ばれ藩邸に匿われた。

・廿五日午前八時頃、赤祢武人が山口の出会河原で一切弁明がないまま処刑、武人は鰐石の河原に来ると立ち止った。ごみ溜まりの河原を刑場に選んでいたからである。武人は「証人として時田少輔を呼べ」と主張した。縄掛けの男が「急ぎなせ」と言うのと、武人が「この下郎」と吐いた。処刑は一の太刀で失敗、二の太刀で斬首、首は鰐石の河原に晒された。長府藩主毛利元周もとちかは自ら早馬で駆け付けたが間に合わなかった。この日奇兵隊に禁足令が出された。

武人の父であった玖珂郡柱島（現岩国市）の医師松崎三宅は発狂して他界、妻マキは夫のあとを追って自害した。

(二) 長防臣民合議書とは

周防と長門の二州を防長と呼ぶようになったのは明治以降である。ある民放番組で〇〇防長っ子は耳にするが長防っ子とは言わない。しかし実に興味深い「長防臣民国」という呼び名がある。語順は防長ではなく長防である。

いったい誰が、いつ使い始めたものか。幕末に自国が減びかねない時期に、山県半蔵が慶応二年一月に発案した国名である。

山県半蔵は萩松本村の藩士安田四郎兵衛の三男、慶応元年三丘^{みか}六戸家の領主六戸^{ちか}親基の養子となった藩士である。幼少期には安田辰之助と名乗って近所の吉田寅次郎と机を並べ玉木文之進の講義で兵学を学んだ。よほど優秀だったか、十九才で明倫館学頭山県大華の養子となり山県半蔵と名乗った。

慶応元年十一月二十日、山県半蔵は藩主の名代として六戸備後助と名乗り、木梨彦右衛門を随行させ広島国泰寺で幕府大目付と初の会談を行った。

半蔵は藩主が病気であることを前提に話を進め、八箇条の尋問に対して痛快なる答弁で全ての命令を拒否、交渉は長期化の様相を呈した。

年が明けて慶応二年一月、幕府との長期交渉で藩存亡の機を感じた半蔵は、悲壮なる決意で「長防臣民合議書」を起草した。

長防とは長門・周防二州を示す汎称で、幕末の長州は独立国家「長防臣民国」という体裁を採っていた。長防臣民国とは聞き慣れない文言だが、徳川幕府と刺し違えてでも主権国家として独立するという意味の国名である。こういった強い決意を記した合議書の原本は県立山口図書館に保管されている。

同年二月、半蔵は藩主内覧を経て合議書を小冊子にまとめ、三十六万部印刷製本したと冒頭に記されている。実際は数千部だったとも云われている。

文面には全ての人民が懐に入れて戦に立つという記述が見られ、藩の正当性を訴えて冤罪を晴らすことで、真実を語り継ぐという決意が伺える。

この冊子によって民衆の危機意識が増大し、不満は士族から幕府に向けられ、領内で多発していた一揆が収束、志願兵が増加、物資や駐屯地の提供、さらに民衆の諜報活動まで盛んになったと云う。

慶応二年五月朔日、幕府大目付の永井尚志は国事犯の高杉晋作、桂小五郎、波多野金吾ら十二名を差し出せと通告、これに対し半蔵と小田村は病氣として旅館に籠ってこれを拒否、八日捕縛され広島国泰寺に拘留された。

小田村は半蔵に随行した副使、後の楫取素彦である。両名は四境戦争最中の六月二十九日に山口政事堂へ無事帰藩するが、この功績によって半蔵は正式に宍戸備前の養子となって宍戸璣たきまと名乗る。養子二度目の半蔵このとき三十七歳、三丘領主宍戸備前親基との年齢差は二才であった。

宍戸備前と言えば、下関講和で晋作が名乗った宍戸刑馬よしまも備前の養子という偽名であるが、地元では教育者として知られている。

(三) 勇猛戦士山田鵬輔

一九九二年に刊行された熊毛町史の三八二頁には「山田鵬輔、三丘清尾村住、宍戸備前臣、奇兵隊」とあり、諱は成功、生年月日は不明である。

三丘宍戸家は毛利一門八家の筆頭家老、領地は小松原村・安田村・清尾村・樋口村・八代村、石高は一万千三百余石であった。

詳しい経歴は判明していないが文久三年奇兵隊に入隊、大田絵堂戦の戦功によって慶応元年十一月八日に砲隊司令を命ぜられている。

大田絵堂の戦いを前にした「元治二年乙丑元旦、長門国河原の駅に在り」で始まる中岡慎太郎の「海西雑記」という日記に山田鵬輔の名が登場する。

美祢河原宿で新年を迎えた福田侠平率いる諸隊幹部と中岡慎太郎、その中の一人に山田鵬輔も居たのである。鵬輔はお酒を飲んで感情が高ぶると裸になり、やがて泣き出すという、勇猛かつお茶目な性格が仲間から愛された。

中岡の日記には新年の宴会で酔った山田豊助なる男が直衣のうしを着し、又は鎧を身に付け、これを肴に放吟談笑したとある。「豊助は原文のまま」

おそらく中村鳳輔も一緒に直衣や鎧を身に付けたであろうと推測、鵬と鳳はどちらも伝説上のオオトリ、役目も共に殿しんがり、よき朋友だった。

〔中村鳳輔〕〔奇兵隊士・陸軍中將・後の鳥尾小弥太〕

一月六日からの大田絵堂戦では第一銃隊めいご押伍、つまり銃隊の殿しんがりとして参戦、十日午後、萩軍は大田川が大きく迂回する新井手原まで進軍、みぞれ混じりの吹雪の中で狙撃兵たちが絶体絶命に陥ったとき、決死隊となった湯浅祥之助・三好六郎・山田鵬輔・中村鳳輔らは、四十名の部下を引き連れて見通しのきく小高い丘に登り、そこから急斜面を駆け下りて萩軍の側面を狙撃した。

このとき決死隊は金麗社に鬻を奉納、首に御幣をぶら下げていたことから、絶体絶命の危機を救ったこの急斜面を幣振坂へいかざかと呼ぶようになった。

十四日の明け六つ頃、萩野隊を先頭に萩軍五百名が長

登へと攻めて来ると、膺懲隊ようちやう四十名は大平堤まで後退、堤土手を楯にして大銃撃戦となった。

昼過ぎ、南園隊三十名が側面から大砲攻撃を仕掛け、またもや湯浅祥之助・三好六郎・山田鵬輔・中村鳳輔が部下を引き連れ糸谷から登って、萩軍斥候隊となった萩野隊の側面を狙撃した。

古来戦には捨て駒がつきものである。芸州口の維新団、山代茶筌組、大島口の平生大野家の浩武隊、三丘六戸家と阿月浦家の手兵、小倉口の吉田山内家の正名団などがこれに相当する。藩命に背いた上関茶筌隊は慶応二年五月に解体、直後に芸州口で活躍した維新団百四十五名が組織されている。

山田鵬輔が戦死したのは小倉口で三度目の激戦となった赤坂鳥越峠の戦い、熊本藩の新式砲に足止めを受け、十八人の戦死者と百人以上の負傷者を出し、ついには長州軍が敗走した熾烈な戦いであった。

(四) 小倉最終決戦までの流れ

・六月十四日、晋作が馬関に到着、丁度このとき龍馬が

兵糧米を積んだ桜島丸で馬関にやって来た。龍馬は桂に会って千二百五十俵の兵糧米をどうするか、京に居る西郷からの返却理由を次のように伝えた。「長州征討の始まる長州藩こそ兵糧米を必要とするから受け取れない」ところが小五郎はこの申し入れを断った。

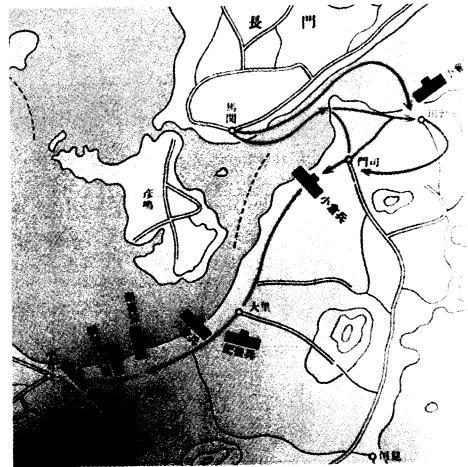
・六月十六日、龍馬が晋作と面会、互いに詩を吟じて酒を酌み交わし、長州の艦隊と共に参戦することに同意、晋作は師松陰の歌を披露した。

「斯くすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」

この日晋作は地元の漁師から、幕府が十八日に長州を攻撃するという情報を掴むと先制攻撃を決断、「いつでも攻めて来い!」という小笠原長行を挑発する書状を送っている。

小笠原長行は小倉湯川の開善寺に籠っていたが、一度だけ前線を視察したと云う。幕府軍総勢二万、長州軍は一千足らずであった。

・六月十七日、熊本藩の溝口蔵人や長岡監物ら諸部隊が



奇兵隊進軍図 (小倉口)

小倉周辺に到着する。長岡監物の本性は米田是豪、米田家当主は代々長岡姓を世襲し細川家次席家老を受け継いでいた。なぜか慶応二年九月に次男米田是保が家督を引き継いだ。

・六月十七日暁七つ、晋作率いる丙寅丸・癸亥丸・丙辰丸が、濃霧にまぎれて田野浦沖に停泊、艦砲射撃を開始して幕府の武器弾薬倉庫を爆破炎上させた。このとき海援隊士菅野覚兵衛が乙丑丸の艦長として参戦した。

山県率いる奇兵隊と福原率いる報国隊が田野浦へ上陸、二百隻もの幕府軍隊輸送船を破壊、武器を隠し持つ周辺人家も全て焼き払った。さらに壇ノ浦から援護の砲弾が幕府側の砲台に向けて撃ち込まれた。なお海援隊士官菅野覚兵衛と石田英吉が操船する乙丑丸は庚申丸に率いられ門司沖に向かった。

・同日午後四時過ぎ、緒戦で勝利した二番砲隊十八名を乗せた和船が帰還する途中、前田沖に流され長州艦庚申丸と衝突して沈没、この日の奇兵隊日記には事故が次のように記されている。『不幸ニシテ前田沖ニ流サレ、庚申艦ニ相触レ、海中ニ沈没ス、橋本虎吉・中村元之進兩人遂ニ不帰』

不運にも海峡に散った二人の奇兵隊士としてお墓は長府大乘寺にある。

・六月廿〇日朝、龍馬が白石邸の晋作を訪ねて談話、九州諸藩への対策として大宰府に滞在中の五卿に対し書簡で次のように働きかけた。

「長州藩に領土を占領する野心は全くなく、武力衝突も

本来の意図ではない」

この旨を九州諸藩に伝えて貰おうという秘策に入った。

・六月廿一日、政事堂より高杉へ諸口勝利の報知あり、昼過ぎ大庭始め報国隊より四人が入来、福田良輔・了巖りょうがん・遠藤貞一郎が小倉襲の事を訊ねに来る。

〈遠藤貞一郎〉「徳山藩士・山崎隊参謀・奇兵隊士久我四郎の兄」

徳山藩医遠藤春岱の長男、元治元年に俗論派に捕えられ獄に繋がれていたが、正義派が政権を奪うと四境戦争小倉口に参戦した。弟の久我四郎は奇兵隊士で第三銃隊司令を務めている。

・六月廿四日朝、狂介と侠平兩人来る。晋作同道馬関へ行く。

・六月廿五日、広島泰國寺で拘留されていた六戸と小田村が放免される。

・六月廿七日、福田侠平率いる奇兵隊の和船が豊後姫島へ出航する。

・六月廿七日、夜、幕府船が通航し一発撃つたので、す

ぐ庚辰丸より撃ち出す。

・六月廿八日、庚辰丸の船将、佐藤又三郎・福原三蔵らが白石家を訪れ一酌、その後晋作と共に出関する。

・六月廿九日未明、豊後姫島村に建設されていた幕府の軍艦用石炭貯蔵庫が、奇兵隊によると見られる放火で爆発、完全鎮火までに四カ月かかったと云う。

・六月廿九日、宍戸と小田村が無事に山口政事堂へ戻る。

・七月二日、小倉に集合した熊本藩軍七千人が周辺農家に駐屯する。ただし、熊本藩からは一兵たりとも大里から門司の前線に出兵していない。

・七月二日、夜になり晋作が白石家に帰る。

・七月三日早暁、晋作が襲撃の仕度を整えて八つ頃白石家を出る。長府藩浜崎の林槌ほか五名、晋作の命を受け和船で小瀬戸より小倉沖に迫る。石炭運搬船らしき和船三隻が幕府艦隊富士山丸に接近して、カノン砲を搭載した奇兵隊の偽装船が富士山丸に三発砲撃、蒸気機関部を打ち碎き福浦方面へ姿を消した。

陸上では長州藩諸隊が門司から大里へ進軍して強固な

守備の小倉軍を攻め、激闘の末に攻略、長州軍は大里を占拠した。

・同日、大里で正名団士今井満太郎が負傷、戸板に乗せられ長府の松小田まで運ばれるも息絶えた。このときに年齢が十四才と判明した。満太郎は吉田村の下川久保出身、慶応二年の春十五才と偽って入団した。齡十四才、彼のお墓は郷里吉田の東行庵清水山にある。

・七月三日、龍馬が山口を発ったが、途中馬関で海戦が続いているのを知り、下関海峡に向かったが、到着した翌日に戦いが終わっていた。

・七月四日、桂が晋作に山口藩庁の様子を書状で伝える。
・七月六日、長府藩士福原和勝・品川章吾・川崎某が白石家に来訪、晋作と共に引島(彦島)砲台を見に出かける。夜になって、一同白石家にて小酌。晋作、桧了巖、片山高岳らは白石家に止宿する。

・七月七日、晋作が夜に入り、白石家に帰る。

・七月八日朝、晋作が白石家に寺内外記の来訪を受けて共に馬関へ出る。このとき佐々木祥一郎も同行する。

・七月八日夜、晋作が寺内と共に白石家に帰り三味線を弾いて大騒ぎする。

・七月九日、四つ時、寺内外記、国司太夫、佐々木祥一郎が白石家を訪ねて、晋作と共に伊崎沖へ丙寅丸を見に行く。

・七月十一日、晋作が寺内外記と共に馬関へ行き、夕方、白石家に帰る。

・七月十二日、晋作が白石家に長府藩家老・細川・三吉かねすけ周亮・三沢の来訪を受け談話、浜崎・林槌も来て各一酌、夕方になり皆帰る。薩摩藩士大山格之助、肥後藩士古閑富次に八十郎と共に応接する。

・七月十三日朝、晋作が白石家に寺内外記の来訪を受け一酌、その後松了巖を連れて一同で馬関へ行く。

・七月十四日、晋作が夜になり、馬関より白石家に帰る。

・七月十五日、晋作が白石家に八十郎と湯川平馬の来訪を受け談話、また寺内外記も来訪し一酌、夜半まで論じながら痛飲、労咳が悪化する。

・七月廿〇日、大坂城で十四代將軍徳川家茂が病に倒れ

急逝する。

・七月廿二日、晋作が船将らと囲碁を打っていたとき、不快を訴えて藩医の長野昌英を呼び寄せ、労咳との診断を受ける。

・七月廿三日、鯉の生き血が労咳によいと奇兵隊士から晋作へ鯉が届いた。

・七月廿七日早朝、熊本藩家老長岡監物（米田是豪）は、臣下数十名を従え、小倉馬借町にある小笠原長行の本陣に出営して謁見を求めた。

（五）肉弾！山田隊長の最期

・七月廿七日早朝、唐戸の亀山八幡宮下から出航した長州軍兵四百名は門司の白木崎に上陸、大里を突破すると馬寄まいぞうに新町に藤松三方向から侵攻したが、熊本藩の世襲家老が赤坂鳥越峠で陣営を構えて指揮する新式の大砲、さらには海上からの艦砲射撃に進撃を阻止され、思うに任せない状態に陥った。

新式の大砲とは佐賀藩士秀島藤之助が開発したアームストロング砲だと推測されているが、戦時中の金属類回

収令で供出されて検証不能である。

第一小隊長山田鵬輔は鳥越峠から発射する熊本軍の砲撃に正面突破を諦め、東側に迂回し木が生い茂る忘言亭山の高台に登り、峠の上から熊本陣地へ駆け降りる作戦を立てた。鵬輔は怯みがちな長州軍の先頭に起って赤禰一丁真つ裸のまま樹間をよじ登り、抜け出た高台は敵陣の手前であつた。

太刀を手にした山田隊長を先頭に「決死で進め！」と声鋭く叫んで小隊は敵陣内へ肉薄、しかし銃身が隊長に向けられて、突入直後に銃弾が胸部を貫通、壮烈なる最期を遂げ、戦死者十五名と手負い二十二名を出した。

このとき銃隊司令阿部宗兵衛が山田隊長の首級を斬り落とし、これを抱えて大里本陣まで退却したが、途中で負傷し翌日吉田の野戦病院で他界した。

あの武廣遜たけひろのぼるの残した「御国難日記」には「この日の戦いは実に苦戦であつた。一寸刻みで賊幕の拠点小倉城に迫る」と記されている。

〈武廣遜〉「奇兵隊士・陸軍大尉」周防国伊保庄の豪農弘

津伊三郎の次男

(二) 小倉城炎上の謎

・七月廿八日、招集された小倉藩の庄屋たちが山田隊の遺体を火葬、そのまま庄屋たちが帰つたため、熊本藩士横井小楠しよんぼくの指示で遺骨が埋葬された。

・七月廿八日、敗戦の報を受けた晋作が「勤皇ノ戦ニ討死スル者也」と記したタスキを締めて、烏帽子に直垂姿で最前線に向かつた。このとき將軍徳川家茂急逝の報が広がり「高杉が將軍を呪い殺した」という噂が流れた。

・七月廿八日、熊本藩本陣に「晋作起つ！」という報が入ると、溝口、長岡、尾藤の三家老は撤兵を決定、夜陰に乘じ密かに軍を撤退させた。

・七月廿九日夜半、小笠原長行は幕府の軍艦で小倉城から離脱、これによつて参戦意欲のなかつた久留米・柳川藩の兵も次々と引き揚げた。

・八月朔日昼前、小倉城を自ら炎上させた小倉藩は山間部田川郡香春かからへ撤退、その後企救郡ききゆうに侵攻した長州藩諸隊は小倉藩兵とゲリラ戦を繰り広げた。

・八月廿九日、小倉藩兵のゲリラ戦が収束するように長府藩十三吉慎蔵と代官湯川平馬が民事取締役となって小倉城に駐留、人心の安定を図った。

・十月下旬、小庵で療養する晋作のもとに各地で圧勝したという吉報が届くと、松陰の墓前に座り、祝い酒を呑んだと云う。小倉藩のゲリラ戦は半年ほど続き、翌慶応三年一月に薩摩藩の仲介で和議が成立した。



佐山にある山田鵬輔の墓

(七) 山田鵬輔の墓

山田鵬輔の墓がある山口市佐山は遊撃隊を率いた石川小五郎の故郷、二人は大田絵堂戦で戦っているが接点は

少ないと思う。ネットでお墓を見たときから、なぜだろう…と不思議に思い、佐山を訪ねることにした。

(一) 北九州と下関にある墓

第一小隊山田隊十五名の墓は長州奇兵隊戦死墓と刻まれたものが、北九州市赤坂の延命寺境内にある。この墓は慶応二年八月に建てられたが直ぐに壊され、「長州奇」の部分が欠けて「兵隊戦死の墓」となっている。

明治になって桂小五郎が長州の僧田中芝玉しぎよくを派遣し延



長州奇兵隊戦死墓

命寺跡に不老庵を建立、現在も山田隊の墓は守り続けられている。山田鵬輔の墓は赤坂の延命寺境内と下関市赤間町の本行寺、下関市桜山招魂場の三カ所にある。

(ii) 山口市佐山にある墓

北九州と下関以外に山口市佐山にもお墓がある。ここにあるのを知ったのは三年前の春、なぜ佐山に建てたのか経緯が分からなかった。

熊毛町史に三丘清尾村住とあり、清尾村は宍戸家の知行地だから旧熊毛町にお墓があるのなら分かるのだが……。昨年、佐山地区史研究会の泉秀夫会長と地区協議会の方々に鵬輔のお墓を案内して頂いた。道すがら、なぜお墓が佐山にあるのかに言及したが、判然としなかった。

(iii) 調査から判明したこと

- ・お墓は佐山東の中村浩美氏宅からほど近い松永墓地の中央にある。
- ・昭和五十二年に中村克人氏（中村浩美さんの父親）が発見された。
- ・山田鵬輔が正五位を追贈された明治三十五年十一月頃に建立されている。
- ・これまで諱は成功と認識していたが、下関市赤間町本

行寺にある埋葬墓には「山田鵬輔源成功」とあるので、鵬輔の諡おくりなは「源成功」かも知れない。

・本行寺の埋葬墓を建立した藤田光介という人物像や経歴が分からない。

おわりに

山田鵬輔の調査は始まったばかり、熊毛町史に「三丘清尾村住」と記された彼のお墓は清尾地区にあるのだろうか。ここに追善句を捧げる。

「羽あれば肥後の砲弾すり抜けて監物の首かき斬り賜う」
主な参考文献

- ・「定本奇兵隊日記」マツノ書店
- ・「日記中摘要」白石正一郎
- ・「佐山第三号」佐山地区史研究会
- ・「維新史跡探訪」志士の杜推進実行委員会
- ・「大田絵堂戦役美東観光ガイドブック」記念事業実行委員会
- ・「新企救風土記」松本洋一